

公民館だより

昭和48年
第3号
発行3月

みんなで腹を立てよう

四考寿訓

近頃の新聞をみていると腹の立つことばかりだ。特に一部商社の買占めによる物価の値上りは、その最たるものだ。土地をばじめ、大豆、生糸、マグロ、セメント、木材、羊毛、もち米、ガーゼ等殆んどが生活必需品だけに、こんなことが許されてよいものかと、腹わたの煮えくりかえる思いだ。

法律にさえ觸れなければ、それが商というもののなだらうか、「金もうけは、人の弱味につけ込んでするもの」と惑る人が私に教えてくれば、しかしものには限度がある。ごく一部の人の金もうけのために、我々庶民の生活がおびやかされるのは、どうにも我慢がならない。「わたしたちは誰でも、今よりもっと楽しく、もっと豊かな生活をしたい」と願いを保持して

います。中略このような願いは、村や町や市、都道府県や国が中心になつて計画を立て、仕事を進めることによつてはじめて実現出来るものが多いのです。そこに政治のはたらきがあります。中略今日の政治のもとになる考の方からは、人々が自分たちの力で、自分たちを治めていこうとすることです。このような政治が民主主義の政治です。これは小学六年生社会科教科書の一節である。公民館活動の目標がわたくしたち地区民の幸せを願うものだとすれば、公民館だよりは、現在のこの不合理に噛みつかざるをえない。

みんなでもっと腹を立てよう。みんなでもっと噛みつこう。その方法をみんなで考えよう。

由良郷土館

開館

四考寿訓

みなさんの御協力で私達の由良郷土館が、去る二月十一日開館致しました。貴重な展示品管理のため、無人開放出来ず御不便をおかけ致しますが、是非一度お出ください。極力経費節減

に努めました。別記の通り赤字となり申し訳ございません。その後地区内の方々から、また遠方からの来訪者から、この運動の主旨に賛同され、金一封を頂戴した方もございます。勿論、市救済へもお願いしてあります。益々立派な私達の郷土館になるよう、今後共みなさんの御指導、御協力をおねがい致します。

由良郷土館会計 (S48 2.11現在)	
収入	106,500円(寄付)
支出	137,000円 (改装工事費 塩ガマケース)
差引△	30,500円

図書室のごあんない

文化部

最近、公民館図書室に入りました本のご案内をするために、母子子の心のつながりについてこんな話があります。ネットご紹介しましたよ

う

勤め先から帰る途中、通りがかりの道わきの家の中から、母子子が口論している激しい会話が耳にとびこんできました。

「なぜ、こんなに遅くまで遊んでいんだね。」
「遊んでたんじやない、お母さんご待ってたんだよ。」

「待ってたなんて、どこで待っていたんだ、もう七時じやないか。」

「だって、バスのところで待ってたんだもの。」
「バスが待っていないって、たんだね。お母さんが忙しくてならないというのに、カバンでっけてほうりだしてあるじやないか。」

共稼ぎの家庭のようです。カギツ子の母の子が、母の帰りバスの停留所まで迎へ、いっただらしい。けれど、どこでいき違ったか、母親の方が早く家に帰っていて玄関先で、いっちらさいが始まった。

こんなことは、どこの家庭でも見られる日常茶飯事の現象で、さして驚くことではないからしれません。しかし、そこに口忙しさに追われ、心のゆとりを失い、子どもを気持とまったくとけあわない心算しい母親の姿が見られます。

も忘れられようとしていくのが、私達には、惜しかったのである。

私達が、この道を歩きはじめた処は、宮屋敷とよばれる。この宮屋敷とよばれる地域は、広さ約三〇〇平方メートル、現在の地に由良神社が移されるまで、熊野神社と言われる神社がこの区域の一角にあり、幾らかの人家が此処に集落をなしていたのである。また、もとの上ノ宮、下ノ宮の旧跡は、加佐郡誌では、今に判然としてある。(同書八四頁)と記されているが、果してそれが何処に当るのか、そして宮屋敷の集落は一体どうなつて、今のように畑地に變つてしまつたのか、一度調べて見たいと思ひながら、道をたどりはじめた。

街道は、この附近では幅は約一・二メートル、家相畑の中を家門に抜ける。

この家門の一隅、街道を左に外れ、山道沿いの蔭に「夷党墓」と伝ふる眞言墓五基がみっさり建っている。墓石に刻まれた年号を見ると、享保十八年のものと、享保十九年のものがある。享保十八年と言へば、赤松一揆の頃で、夷党墓と言われる事と考へ合わせ、この一揆と果

して関係があるのではないかという気がするが、赤松一揆に関する由良での資料は全く発見されていないので、今後の研究を期待したいものである。

この山道を登つた西の台地一帯が如意寺の旧域であつたという。そして「腸流礼の記事」へ中西六石衛門氏蔵にいわゆる東墓所はこの一帯ではなかつたのであろうか。この事もまた調査してみたいものである。

再びもとの街道にかへつて奈具神社の前に出る。この間、一帯の密柑畑、道はその中をひっそりと通り抜ける。この道の西側が「茶屋河原」とよばれる。昔、此処に赤兵衛の茶屋といふのがあつたという。前掲「腸流礼の記事」の中にも、茶屋入軒が山津波で水に流され、後にそれ礼それ、下の屋敷に移されたことが記され、そのとき死亡した人の中に赤兵衛の名が見えることから、はつきり裏付けられて興味深い。

奈具神社は、由良では最も由緒ある社であるが、詳しい事は分らず、延享五年(一七四八)夏七月と刻まれた石灯笼や狛犬像がこわれたま、本殿積の片隅に収めてあり、借しいこと

だと思ふ。

宮津街道は、奈具神社の横から密柑畑の中に入り、石塔ヶ淵の先までの間は、今ははつきりしていない。そして、この北の先で街道は上りにかかる。この曲り角附近一帯には、五輪塔導、二体地藏が半ば埋もれて、数多く見られ、その上、南一帯の竹藪の中には、同じように五輪塔導、二体地藏が散乱して埋もれている。幾つかの「元文年間」一七三六(一四一)の年号を刻んだ墓石も見出される。それは、どれも文化十一年(一八一四)七月の腸流礼以前のものとあり、この台地一帯が墓地であるのが尋常である。そしてそれは、腸流礼西墓所並に村中塚塔地蔵余程の大石塔も有り、雖も長く流札八半行衛知れずなつた災害に大崩壊したものと見て差支えないのではないか。

宮津街道は、この西墓所を左手に見ながら、そして今の人々は一帯の密柑畑を左に七曲り峠を登る。約一〇〇メートル、右側の路傍に供養塔が二基建てられていたのを見る。下手のものが通称「首切りの松供養塔」とされ、上手のものがまた「紫勸進の碑」として、山庄大夫傳説と結びつけられていたが、矢張り

それ以外に、如意寺の畷内にあつた供養塔があつたと見るのが正しいのではなからうか。

この辺りでは、道幅も約二メートル、石畳の跡も見られ、昔の面影も充分残っている。二〇メートル程で、街道は完全に山道にふかり、更に約三〇メートルで七曲り峠の頂上に達する。

この先から街道も、漸く道らしくない道になる。道の中央にも木が生い茂り、或は、崖に削りとりられ、或は雑木の間にくぐり、倒木を越えて進む。頂上から約五〇メートル、遂にこれ以上すすむことが出来なくなり、先走をあきらめることとなつた。この間、約二〇〇メートル、私達の七曲り峠行はその全道程の略々半ばを辿りながら、その先は殆ど破壊され、明らかにすることはできなかつたものの、その概要を地図の上で確認でき、意義ある調査行であつた。

あとがき 今後、この道を修復されて、自然歩道として復活することにもなれば、由良を愛するもの一人として、喜ばしいことと思ふのですが……(文真 小谷)